

出町神明宮創建三百五十年祭

平成十二年(西曆二〇〇〇年)九月十六日



目次

一、ご挨拶	2
二、氏子の皆様へ	3
三、出町神明宮の沿革	4
四、三百五十年祭	6
五、三百五十年祭を終えて	8
六、収支報告	11
七、寄進者芳名	12
八、実行委員会名簿	14

ご挨拶

出町神明宮創建三百五十年の記念すべき諸行事を滞りなく終える事ができ安堵いたしております。これは、ひとえに氏子全員の皆様の力強い御支援の賜物であり、深く感謝申し上げます。

三百五十年を思います時、その歴史の重さを改めて認識をいたしました。創建の頃は、戦乱から徳川幕府の安定期に入つた時期であり、全国各地で原野の開拓が始まり、新しい町造り（町立て）がなされたものと思います。そして、神明宮は新しい町の心の寄り所であり、人々の人間関係の中心として多大な役目を果たしてきました。その後、時の移り変わりの中、二度の大火で焼失しましたが、先人の皆様の大きな努力で、その都度、見事に再建されました。近年に入り、激動と変革の社会は、我々の価値観すら大きな変化をもたらし、神道（神社）に対する考え方にも、極端な差異が表われております。第二次大戦の時代には、神国日本として国民すべての中心でありましたが、現代では、信仰の自由と、古来から絶対神を持たない日本社会は、それぞれ人々の思いは様々であります。しかしながら、出町神明宮は、砺波市発生の地の神社として、市内数多くの神社を代表するものであります。このことをしっかりと自覚し、誇りと責任をもって、これらの維持管理をしていかなければならないと確信しております。氏子一人一人の心の問題でもありますが、神明宮を基点とした町づくりと、近代化をはかり、人々の交流が最も重要であろうと思います。皆様が創建の精神に戻り、原点に立つて考えていただく事を期待しております。

今後の皆様の一層の御支援御協力を重ねてお願いする次第であります。

氏子会代表

稲垣孝二

実行委員長

神田嘉雄

氏子の皆様へ

出町神明宮 宮司 林 直 大

昨年の秋祭りに出町三百五十年ということでお詣りいただきました。その頃より、翌年の神明宮創建三百五十年の記念の年のことについて、どのくらいの事ができるものか案じながらも祖霊に対して感謝は申し上げなければならぬものと思っていました。

その後、祭りの後の直会の時などにご相談いただき、何度も会合を積み重ねて実行委員会を発足させていただきましたことは思いの外のことでした。

お宮さんには神様があられて皆さんを守っていらっしゃるというときは、御祭神として天照大神様を申し上げますが、同時に氏子の祖霊もお鎮まりますことを忘れてはいけません。

とりわけ、記念のお祭りともなれば沢山の氏子の祖先の神霊が、自分たちの子孫はどのようなお祭りをしてくれるのだろうかご覧になります。

二郎兵衛も見ています。藩政時代の賑いを支えた祖先も見ています。明治になって三十三年の大火後、大正八年、神社の復興を果たした祖先も見ています。昭和十九年の大火に類焼後も急遽社殿を竣工させた祖先も見ています。五十年前、創建三百年祭が開町三百年祭に合わせてお祝いされた時の祖先も見ています。雨漏る本殿を畏み、もう火事はお免れだと現在の鉄筋コンクリート造りの社殿の造営につき、本殿と幣拝殿の二度に分けての度重なる御寄進の依頼に快く浄財をお寄せくださった近い祖先の方々も見ていらっしゃる。

皆同じ思いであります。自分たちは出町に住み、出町の繁栄を願ってきました。お宮さんを心の支えとして生きてきた。そのお祭りに曳かれる子供歌舞伎曳山を誇りとしてきた。さて、三百五十年だということではないか。子供達はどのようにしておるかとおられるわけです。

本当におかげさまで、御本殿の基礎の改修が成り、立派な献茶式を挙げていただき、来賓の参列も賜り、浦安の舞の外にいくつもの神賑わい行事が行われました。特に祭日前に氏子総出により境内、拝殿、社務所の清掃奉仕がりましたが、これはおそろく何十年ぶりのことではなかったでしょうか。

少しは顔向けできているでしょうか。日頃は神頼みばかりではありませんが、幾ばくかは御心を和めるお祭りとなりましたでしょうか。神は崇敬を積むことによりさらに威を増すといえます。これから皆様には身近なお宮としてお詣り頂きたく、出町の平和と繁栄を祈りつつご奉仕するものであります。

出町神明宮の沿革

慶安 三年（一六五〇年）

三月十六日、杉木新町の総氏神として鎮座。爾来、その日をもって例祭日とする。（明治五年より太陽曆に改まり、四月十六日となる）

明治三三年（一九〇〇年）

八月十九日、出町大火にて類焼。以後十九年間、仮殿時代となる。

大正 八年（一九一九年）

社殿復興。本殿七坪・幣殿十四坪・拝殿二十坪・神饌所社務所十五坪・渡廊五坪を完備し、直ちに『神饌幣帛料供進指定村社』に指定される。出町は砺波地方の交通の要衝として官公庁が多く、団体参拝も逐次増加した。

昭和 六年（一九三一年）

本殿板葺屋根を銅板葺に改修。竣工と同時に始まった毎朝の氏子日供巡拝が終戦間際まで十三年間続いた。（あけぼの会）

昭和十九年（一九四四年）

五月七日、フーン現象の強風の中、山王川東岸より失火、川以東を総舐めとする大火となり、社殿再度類焼。神祠は太郎丸鍋島八幡宮へ仮遷座されたが、戦時下に応召する兵が後を絶たず、出陣祈誓の為に急遽仮建築を森田建設に委嘱する。物資の乏しい中、各方面の格別の配慮により二十一坪の社殿を六ヶ月にて竣工。同年十一月に鍋島八幡宮より還御せられた。

この時の防風林の焼失によって西からの風雨に曝され、その後の数度にわたる屋根修理にもかかわらず雨漏りが絶えなかった。

昭和三五年（一九六〇年）

総代会役員会における数次の協議により、鉄筋コンクリート造の本殿造営を決議。

昭和三十七年（一九六二年）

八月、本殿改築起工奉告祭執行。神祠は杉木日吉社に仮遷御された。
九月、起工（森田建設）。第五九回伊勢神宮式年還宮撤下拝領古材を屋根材に使用し十二月に完工。同二二日還御。

昭和三十八年（一九六三年）

四月十五日、本殿竣工・参道完成奉告祭齋行。

五月二日、本殿復興慶賀祭執行。神社本庁弊使として富山県神社庁長尾崎定業氏参拝。（本殿工事と同時に弊拝殿の板葺を色トタン葺に改めた）

昭和四十九年（一九七四年）

六月、神明宮復興奉賛会を結成。

爾来、氏子会長を中心に、奉賛会全体委員会・氏子会役員会を重ね、各町内の要望を聴取しつつ、建設及び資金調達に尽力された。

昭和五二年（一九七七年）

十二月、弊殿・拝殿の本建築・内装共に竣工（森田建設）。

昭和五三年（一九七八年）

五月一日、社殿完成慶賀祭を執行。

平成四年（一九七八年）

前年より社務所復元の議起こり、建設委員会を設けて浄財を募る。旧社務所は出町招魂堂（現五十榎神社）の付属建物を移築したもので、老朽化甚だしく危険な状態であった。四月に起工（稲垣建工）し、八月竣工、慶賀祭を行った。

平成十二年（二〇〇〇年）

九月十六日、創建三百五十年を迎え、記念祭を執り行う。

創建三百五十年祭

平成十二年九月十六日（土曜日）午後一時より、秋季祭礼に合わせて、氏子一同により出町神明宮創建三百五十年祭が行われた。

一、神事

（秋季祭礼並びに創建三百五十年記念祭・午後一時～二時三十分）

・神楽

・修祓

・一拝開扉

・献饌

〈献茶〉

・祝詞奏上

・祭詞奏上

〈浦安の舞〉

茶道裏千家教授所裏松舎主宰

大島宗翠先生

松井 優佳（木舟町・出町小6年）・五島 美慧（西町・出町小5年）

萩沢香葉子（新町・出町小5年）・瀬尾 美咲（南町・出町小5年）

二、神賑わい行事（午後三時～四時三十分）

・玉串奉奠
・撤饌
・閉扉一拝
・神楽
・挨拶

出町神明宮宮司

林

直大

・雅楽演奏

富山県神道青年会

・吟詠

富山県松風会

・太鼓奉納

春日町春日太鼓保存会

三、直会（祝賀会・午後五時～七時）

氏子各位

出町神明宮創建350年祭の御案内

杉木新町の町立が始まり351年、1年遅れて町の守神神明宮が建立されました。

長い年月、多くの人々の喜びと悲しみを大きな力で包容され、また維新、戦争、恐慌、大火など激動の時代を温かく見守っていただきました。

350年という記念すべき節目を氏子一同で盛大にお祝いしたいと思います。

当日のスケジュールは別紙の通りです。

たくさんの皆様の御出席をいただき、祝酒を酌み交わそうではありませんか。

日時 9月16日(土) 午後1時

会場 出町神明宮

平成12年9月吉日

氏子会代表 稲垣孝二
実行委員長 神田嘉雄



▲ 稲垣氏子会代表による祭詞奏上



◆ 本殿に集まった氏子の皆さん



▲ 大島宗翠先生による献茶



三百五十年祭を終えて

氏子の皆様の御協力と実行委員各位の尽力によって、平成十二年九月十六日『出町神明宮創建三百五十年祭』が無事挙行されました。あいにくの曇り空ではありましたが、却って神事に相応しい荘厳な雰囲気のうち、記念の諸行事を滞りなく終えることが出来ました。

神事に始まり、神賑わい行事、そして夕刻からの直会へと進行する間、式典に参列した氏子一人一人が、自分達の町を三百五十年にわたり見守り続けてきた出町神明宮に対する崇敬の思いを新たにいたしました。と同時に、それは私達自身に、出町で生まれ育ったことの意味、また、出町神明宮の氏子であることの意味を改めて問いかける一日でもありました。

昨秋の『出町開町三百五十年の集い』に引き続いて、私達は、我が町の歴史、そしてそれを見守ってきた神明宮の歴史を振り返る貴重な機会を得ました。そして、たとえ五十年に一度とはいえ、自分達の町と神社の誕生日が祝えるということは、ある意味でたいへん幸せなことであると実感しました。それは、この町と神社が、はつきりとした意志と目的を持って生まれたということです。「出町」という名前の由来すら忘れようとしている現在、また、自分が神明宮の氏子であることすら忘れそうな現在、私達は先人の意志と目的をもう一度思い出さなければなりません。

出町神明宮は、慶安三年（一六五〇年）の春三月（旧暦）に杉木新町の総氏神として鎮座されました。それは、出町の開祖杉木村二郎兵衛による市場町開設の願い出の翌年のことです。

杉木・深江・太郎丸の三村から割譲した長さ三百間・横幅八十間（二万四千坪）の敷地に百軒の商家を並べて市場町を作るといふ願い出も、あくまで計画であったにすぎません。しかも、一口に百軒とは言っても、当時（江戸時代前期）の人口や大家族が普通であったことを考慮すれば、今の二千人位の町に相当します。実際、百軒の街



▲ 富山県松風会による吟詠



▲ 各町から選ばれた小学生による浦安の舞



▲ 春日太鼓保存会による太鼓奏納



▲ 富山県神道青年会による雅楽演奏

並みが揃ったのはそれから百年近く経ってからと伝えられています。そもそも、村が手放したということ自体、それが村境のどうでもいいような土地であったことを物語っています。また、そのような場所でなければ、全く新しい町を作ることも出来なかったでしょう。要するに、そこには何もなかったはずです。

にもかかわらず、翌年春には出町神明宮が創建されています。おそらく、最初の氏子は三十軒にも足りなかったのではないかと推測されます。町とは名ばかりの状態であつたに違いありません。

これは宗教心・信仰心の篤さ云々という問題ではありません。むしろそれを思えば思うほど、この最初の氏子達の町作りへの情熱に感嘆するしかありません。僅かな数の自分達が最初の氏子となって新しく氏神を祭るということは、その氏神と運命を共にするという不退転の決意なくして出来ることではありません。言わば、それは神社の形をした血盟状の如きものだったと考えていいでしょう。

逆にそのことが、後から加わる者に対する一種の「踏み絵」となつたであろうことは想像に難くありません。新しく出町神明宮の氏子になるということは、元の村の氏子から抜けることを意味します。信仰上の本籍が移動するのです。それこそ身も心も新しい町の一員になるということだったでしょう。

出町は出「町」だったのです。現代のショッピングモールのような出「店」ではなかったのです。「店」を「町」にする為に、神明宮がどうしても必要だったのであり、また、神明宮も三百五十年にわたって「店」を「町」にする役割を果たし続けてきたのです。

ヒトがその歴史をイエに刻みイエがその歴史をマチに刻み、そしてマチの歴史をカミが見守る。——この仕組みを「古い」の一言で葬り去ることは到って簡単です。現実には殆ど機能しなくなっていると言っているかもしれません。

しかし、現代に生きる私達が、これに代わる新たな仕組みを未だ見出しえていないことも確かです。刻むべきイエやマチ、また、



◆ 記念事業として本殿周囲土留壁改修工事を行いました



◆ 式典終了後 直会が盛大に催されました



見守ってくれるカミを失えば、私達は自分の生涯を「自分史」とやらにでも記録するしかなくなるのです。

出町が砺波市へ、さらに砺波広域圏へと発展し、全国でも有数の住みよい町と評価されるに至ったのも、三百五十年前、出町神明宮を創建した少数の氏子達の悲壮な決意が原点だったと言って過言ではないでしょう。それは、新しい国を建てる為にメイフラワー号に乗り込み、大西洋を渡った清教徒達の決意でもあります。

夕刻からの直会には百人余の氏子達が集まり、創建三百五十年を祝いました。その折、『四百年は大丈夫かなあ』という声があちこちの席で聞かれました。とりわけ、五十年前の、町を挙げての提灯行列・仮装行列などの様子を記憶されている年輩の方々にとって、その懸念は当然のことでありましょう。

出町が「町」であり続けている限りは何の心配もありません。また、出町が「町」でなくなる時は、日本中の「町」の大半が消えうせている時でもあります。勿論、その為には、二百年前の子供歌舞伎に続く新たな「町興し」が必要になることも十分に考えられます。商業地域が「町」であり続けることは、それなりに難しいことです。

奇しくも、出町と出町神明宮の歴史の節目は西暦百年紀とほぼ重なります。三百年、三百五十年がそうであったように、四百年、四百五十年も二一世紀の折り返し、また二二世紀の幕開けとなります。私達は、新たな世紀を迎え、また折り返そうとする度に、自分達の町と神社の歴史を振り返ることとなるのです。

そうした悠久の時の流れの中で、「宮」は「町」とそこに生きる人々をじっと見守り続けてきました。よしんば五十年に一度であっても、開町と創建の歴史を辿ることによって、この出町と出町神明宮に対する先人達の並々ならぬ決意と情熱が、その時々、それぞれの人の胸中に鮮やかに蘇ってくることを願わずにはいられません。

(佐藤寿一 記)

記念祭及び工事収支報告

(平成十二年十二月三十一日現在)

《収入の部》

・ 寄進金

四、〇二一、〇〇〇円

・ 祝儀・雑収入

八二、〇〇〇円

(収入計

四、一〇三、〇〇〇円)

《支出の部》

・ 設立費・諸会合費

六九、二二八円

・ 式典準備費

三一〇、〇二三円

・ 祝賀会費

四八六、五七〇円

・ 剰余金

六六六、五九七円

(支出計

四、一〇三、〇〇〇円)

・ 修繕工事費

一、二〇四、〇〇〇円

・ 式典費

九九三、二〇二円

・ 記録費・出版費

三七三、三八〇円

最終剰余金は、特別基金として氏子総代会が管理し、氏子会の総意に基づき、今後使途を検討することとなりました。

寄進者芳名

《大口寄進者》

・三十万円

・稲垣 孝二 殿（氏子会代表）

・北陸銀行 殿

・十万円

・神沢 幹夫 殿（特別相談役）

・小竹 三郎 殿（氏子会副代表）

・山崎 喜作 殿（氏子会副代表）

・五島 辰夫 殿（子供歌舞伎振興会長）

・富山第一銀行 殿

・五万円

・富山県信用組合 殿

・神田 嘉雄 殿（実行委員長）

・水木 隆 殿（氏子会副代表）

・吉田 末治 殿（氏子会副代表）

《各町寄進》

(氏子外特志を含みます。大口寄進者は別途・前掲の通りです。)

町名	世帯数	寄進総額	内 訳
東町 氏子一同	二七	三七〇、〇〇〇円	・二万円×一〇口 ・一万円×一七口
中町 氏子一同	二八	二八〇、〇〇〇円	・一万円×二八口
西町 氏子一同	五三	七〇五、〇〇〇円	・三万円×二口 ・一万円×三六口 ・二万円×一四口 ・五千円×一口
南町 氏子一同	五六	五四五、〇〇〇円	・一万円×五三口 ・五千円×三口
新町 氏子一同	三五	三三一、〇〇〇円	・二万円×四口 ・一万円×二二口 ・五千円×七口
木舟町 氏子一同	一三	一四五、〇〇〇円	・二万円×二口 ・一万円×一〇口 ・五千円×一口
川原町 氏子一同	一二	一九五、〇〇〇円	・三万円×三口 ・二万円×二口 ・一万円×一口 ・五千円×一口
合 計	二二四	二、五七一、〇〇〇円	

各町内からの御寄進につきましては何分にも多数であり、本冊子には掲記出来ませんでした。全寄進者の芳名・寄進額につきましては、詳細明記して奉納・保管いたしますので御諒承下さい。

実行委員会名簿

相談役

・林 直大
・稲垣 孝二
・山崎 喜作
・水木 隆
・吉田 末治
・神沢 幹夫

委員長

・神田 嘉雄

副委員長

・小竹 三郎

委員

川原町	木舟町	新町	南町	西町	中町	東町
・鷹西 彰	・高橋 章	・加藤 和夫	・鷹屋 恒正	・梶谷 宏	・八木 正喜	・渡辺 利治
・島村 忠雄	・松井 幸次	・松村 三郎	・金森 博幸	・宮村 弘	・遠藤 康生	・関野 章
・啓塚 信一	・大島 清	・萩沢 順一	・五野 和之	・佐藤 信吾	・近藤 喬	・渡辺 耕一
					・三輪 好森	・稲垣 修
					・稲垣 光男	

